

共通テスト
対策問題集

2025

5



SERIES

国語

古典 [古文・漢文]

I シリーズ

河合出版編集部 編

I 005-024



* 3 2 4 9 0 8 1 0 0 5 0 2 4 *

河合出版

共通テスト対策問題集

Vol.5

国語 古典「古文・漢文」

はじめに

本問題集は、「共通テスト」の出題形式・内容に「慣れ」、不得意な形式や分野を「克服」して、共通テストへの総合力アップを目指すための「解法」を重視した問題集です。

本書の特徴

多様な問題形式に対応

収録問題は共通テストを想定し、本問題集のために作成した問題で構成されています。繰り返し取り組むことで多様な問題形式に「慣れる」ことができます。

難易度表示

それぞれの問題にはその問題の難易度を示す☆をつきました。

★☆☆…基本問題

★★☆…発展問題

★★★…応用問題

自学自習も可能な丁寧な解説

本問題集の解説は正解のみならず、「なぜ間違いか」まで掘り下げた詳しく丁寧な解説で「自学自習」用として使用することもできます。

目次

古文

1	説話『発心集』『宇治拾遺物語』 軍記物語『平家物語』	4
2	読本『雨月物語』 随筆『玉勝間』	14
3	歴史物語『月のゆくへ』 軍記物語『平家物語』	22
4	御伽草子『岩屋の草子』	32
5	随筆『枕草子』	40
6	評論(思想)『末賀乃比礼』『くず花』	48
7	作り物語『堤中納言物語』 物語絵巻『掃墨物語絵巻』	56
8	紀行『東関紀行』	66
9	歌論『俊頼髓脳』『古来風躰抄』	76
10	擬古物語『兵部卿物語』	86
11	作り物語『源氏物語』	94
12	歴史物語『今鏡』『栄花物語』	102
13	歌物語『平中物語』 私家集『伊勢集』	110

漢文

1	史伝『戦国策』	120
2	説話『述異記』	128
3	説話『菽園雜記』	134
4	説話『庚巳編』	138
5	思想『列子』	144
6	史伝『史記』・漢詩『戴名世集』	150
7	思想『韓非子』	158
8	評論『穀山筆塵』	164
9	随想『簷曝雜記』	170
10	漢詩『白氏文集』・史伝『史記』	178
11	評論『劉子』	186
12	史伝『晋書』・漢詩『文選』	194
13	逸話『淮南子』	202

6

次の【文章Ⅰ】は、儒学者の市川匡麻呂が記した『末賀乃比礼』の一節で、国学者の本居宣長が唱える説に対する批判を記したものである。【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】に対する本居宣長の反論を記した『くず花』の一節である。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い(問1～4)に答えよ。なお、設問の都合で【文章Ⅱ】の段落に1～4の番号を付してある。

【文章Ⅰ】

上つ代の古事を知るべき御文は、古事記・日本書紀なり。天武天皇の御代に、**a** 詔を承りて御文どもを読み習ひ覚えたることどもを、元明天皇の御代に、太朝臣安麻呂書き取りて古事記を作り、また八年を経て、舍人親王、書紀を作り給ふとなむ。**b** (ア) すべて言伝と言ふものは、人に命の極みあり、事に伝への謬あり、多くは消ぬるがちにして、実ならぬ事のみ残れるぞ常の例なる。文字ある国は、文字にて事を記しつれば、上つ代をも今の如く知らず事いちらるけく、これを文字の徳と言ふめり。御国は、**c** 幾年や経たりけむ。すべて文字なき間は、その事は言伝のみにして、消ぬる例で千年ばかり、神武より上つ方は、また**d** 心得てよ。御国の文読まむ人、よくこの旨を

【文章Ⅱ】

1 言を以て言ひ伝ふると、文字をもて書き伝ふるとを比べ言はむには、互ひに得失ありていづれを勝れりとも定めがたき中に、いにしへより文字を用ゐなれたる今の世の心をもてみる時は、言伝へのみならむには、万の事おぼつかかなかるべければ、文字の方はるかにまさるべしと誰も思ふべけれども、上古、言伝へのみなりし世の心に立ちかへりてみれば、その世に

★★☆

解答時間
20分

/ 45

解説
48頁

は文字なしとて事たらざることはなし。これは文字のみならず万の器も何もいにしへにはなかりし物の、世々を経るままに新たにい出で来つつ、次第に事の便よきやうになりゆくめる。その新しく出で来始めたる物も、年を経て用ゐなれての心には、この物なかりけむ昔はさこそ不便なりつらめと思へども、なかりし昔も e さらに事は欠けざりしなり。

2 文字のうへにても皇国(注11)には漢字あり、片仮名あり、平仮名ありて、この三つの内一つも欠けては事によりて不便なるを、(注12)漢国には、片仮名も平仮名もなければ、さらにこれなくて不便なりとは思はず。また遠き所へ大切の用事を言ひやるに、口状にては違たがひあるが故に、書状にて言ひやる、これは文字の徳なり。しかれどもまた、書状にては分かりがたき事もありて、品(注13)によりては使つかをさして詳しき事は口状にて言ひやりてよく分かるる事もあり。これはまた言伝への徳ならずや。されば「書は言を尽くさず」と漢人もいへりき。(注14)

3 これをもてみれば、上古の事も、後まで言伝へのままならば、かへりて詳しき意味も伝はるべきが、(イ) なかなかに文字伝へになりて失ひぬることもあるまじきにあらず。なほこの得失を言はば、互ひに種々くくあるべきを、今、難者(注15)、言伝への方には失のみ挙げて得を言はず、文字伝への方には得のみ挙げて失を言はぬは、偏かたはならずや。言伝へは実ならぬ事のみのことと言へれども、この失は文字伝へにても同じ事なり。文字にても虚うそを書き伝ふれば、実まことはのこらず、言にても実を言ひ伝へば、などか実のこらざらむ。

4 また、言に伝への誤りありと言へるは、まことにさることにて、文字は不朽の物なれば、一たび記し置きつる事は、いく千年を経てそのままにのこるは文字の徳なり。しかれども文字なき世は、文字なき世の心なる故に、言伝へとても文字ある世の言伝へとは大いに異にして、うきたることさらになし。今の世とても、文字知れる人は、万の事を文字に預くる故に、空にはえおぼえをらぬ事をも、文字しらぬ人は、かへりてよくおぼえをるにてさとるべし。

(注)

- 1 天武天皇——第四十代天皇（在位六七三〜六八六年）。
- 2 稗田阿礼——奈良時代の官人。『古事記』の編纂にかかわった。（へんさん）
- 3 元明天皇——第四十三代天皇（在位七〇七〜七一五年）。
- 4 太朝臣安麻呂——太安麻呂（太安万侶とも）。奈良時代の官人。『古事記』執筆者の一人とされる。
- 5 舍人親王——天武天皇の第三皇子。『日本書紀』編纂の中心となった。
- 6 いちしろけく——明白で。
- 7 応神天皇——第十五代天皇。五世紀ごろの在位とされる。
- 8 神武天皇——初代天皇。紀元前に在位した伝説上の人物とされる。
- 9 秘事——ここでは、古い時代の天皇が世を治めるための方法の一つ。
- 10 上古——大昔。
- 11 皇国——日本。
- 12 漢国——中国。
- 13 品によりては——場合によっては。
- 14 書は言を尽くさず——中国の書物『易経』（えいけい）にある言葉。
- 15 難者——他を非難する者。ここでは市川匡麻呂を指す。

問 1 傍線部(ア)・(イ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) すべて

- | | | | | |
|-----|------|-------|------|------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 大いに | ほとんど | おしなべて | そもそも | まったく |

(イ) なかなか

- | | | | | |
|-----|------|-----|------|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| むしろ | すっかり | 確実に | ちょうど | 徐々に |

Copyright

問2 波線部 a～e について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① a 「詔を承りて」は、「承り」が謙讓語であり、作者から「稗田阿礼」への敬意を込めた表現になっている。
- ② b 「作り給ふとなむ」は、「なむ」が願望の終助詞であり、「舍人親王」が歴史書を作ってほしいと願う表現となっている。
- ③ c 「幾年や経たりけむ」は、「や」が反語の係助詞であり、あまり時が経っていないことを強調した表現になっている。
- ④ d 「心得てよ」は、「てよ」が完了の助動詞の命令形であり、日本の歴史書を読む人に注意を喚起する表現になっている。
- ⑤ e 「さらに事は欠けざりしなり」は、「なり」が伝聞の助動詞であり、昔は事足りていたという事実が言い伝えられてきたことを表している。

問3 【文章Ⅱ】の①・②段落についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 物事を言葉で伝えることと、文字で伝えることの得失を公平に比べることは、文字を使い慣れた現在では不可能なことだ。
- ② 文字は道具と同じで、新しいものがどんどん作られ、その便利さに慣れてしまうと、文字のなかった昔に戻ることができない。
- ③ 日本には文字が漢字、片仮名、平仮名と、文字が三種類もあるので、漢字しかない中国よりも複雑な事象を理解することができる。
- ④ 遠方へ大事な連絡をする際には、書き記した方が間違いがないという文字の長所を生かして書面を利用することがあり得る。
- ⑤ 言葉で伝えることは、情報の量という点において文字で伝えることには及ばないということを中国の書物も述べている。

問4 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教師——今回読んだ文章は、リード文にもあったように、【文章Ⅰ】は、本居宣長の唱える説に対する批判を記したもので、【文章Ⅱ】は、それに対する宣長の反論を記したものでしたね。この二つの文章の考え方について、みんなで話し合ってみましょう。

生徒A——【文章Ⅰ】では、『古事記』などの日本の古い時代について記した書物に対する、作者の考えが述べられているね。

生徒B——そうだね。【文章Ⅰ】では、そういった書物を読む場合について、**X**ということを述べているよ。

生徒C——そうか、だからその意見に対して、【文章Ⅱ】では、**Y**と反論しているのか。

教師——その通りです。また、宣長は言葉による伝承と文字による伝承について、それぞれの弊害についても意見を述べています。

生徒A——なるほど、【文章Ⅱ】では、**Z**とも言っています。

教師——そうです。どちらも一長一短があって安易にその優劣を決めることはできないということですね。それこそが宣長の思考の基本姿勢なのでしょうね。

(i) 空欄 X に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 文字のない時代の歴史は、言い伝えられた内容に誤りがあったり、後世に創作されていたりと信憑性しんぴやうせいに欠ける
- ② 人の記憶はいいかげんなものであるので、言葉だけで伝えられた歴史を裏付ける証拠を探さなければならぬ
- ③ 言葉によって語られた歴史も、文字の発明によってすべて記録されるようになり、信頼のおけるものとなった
- ④ 文字がなくても、古代の歴史は正確に言い伝えられてきたのに、後世の権力者によって内容は書き換えられた

(ii) 空欄 Y に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 言葉は真実を語るものであるが、文字は虚実に関係がないので、文字で書かれた歴史が常に正しいわけではない
- ② 文字があっても嘘うそを記せば歴史の真実は伝わらないのだから、文字で書かれた歴史がすべて正しいとは言えない
- ③ 古い時代の歴史でも、後世まで言い伝えられてきたものなら、文字で書かれた歴史書よりも信用できるはずだ
- ④ 書かれた歴史はそれ自体が消滅する恐れがあるが、言葉による伝承は人が生存する限りこの世から消滅はしない

(iii) 空欄 Z に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 言葉による伝承は文字がない時代では仕方ないが、文字の発明後も言葉に頼るのは、文明に逆行することになる
- ② 言葉が巧みな人には、言葉によって伝承される歴史は、自分の都合にあわせて改めることが簡単にできてしまう
- ③ 文字による伝承は、一度記しておけばいつまでも残るものだが、逆に書き改めることはできなくなってしまう
- ④ 文字を知っている人は、文字に頼り過ぎるあまりに、文字がなかった時代の人よりも物事を記憶する能力が劣る



9784777227600

ISBN978-4-7772-2760-0
C7381 ¥1000E



1927381010000

税込定価1100円



国語

古典〔古文・漢文〕



KAWAI PUBLISHING

学
年

組

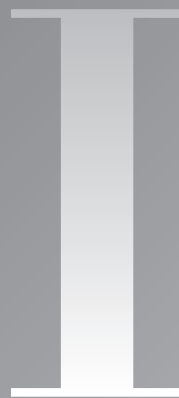
番
号

名
前

共通テスト
対策問題集

2025

4



SERIES

国語

現代文

解答・解説編

I シリーズ

河合出版編集部 編

I 004-A24



* 3 2 4 9 0 8 1 0 0 4 A 2 4 *

河合出版

目次

▼正解一覧……………3

論理的文章

- 1 「心のたなびき」 鷲田清一 ……………8
- 2 「承認をめぐる病」 斎藤環 ……………13
- 3 「科学と人間の不協和音」 池内了 ……………21
- 4 「ダ・ヴィンチの蝶」 福岡伸一・
「人間にとって科学とは何か」 村上陽一郎 ……………27
- 5 「家事のしすぎ」が日本を滅ぼす」 佐光紀子・
「暮らし」阿部純・「日用品のデザイン思想」 柏木博 ……………34
- 6 「贈与の系譜学」 湯浅博雄・
「贈与の歴史学 儀礼と経済のあいだ」 桜井英治 ……………40
- 7 「『生きた風景』へ」 中井祐 ……………46
- 8 「文化を交叉させる 人類学者の眼」 川田順造 ……………53
- 9 「アート・ヒステリー」 大野左紀子 ……………60
- 10 「非常識な建築業界」 森山高至・「建築を愛する人の十二章」 香山壽夫 ……………66

文学的文章

- 11 「生きるほくら」 原田マハ ……………74
- 12 「土」 長塚節 ……………80
- 13 「マイマイ新子」 高樹のぶ子 ……………85
- 14 「枯木の花」 木山捷平 ……………91
- 15 「沈黙」 遠藤周作 ……………99
- 16 「お時儀」 芥川龍之介 ……………107
- 17 「ロクタル管の話」 柴田翔 ……………114
- 18 「たずねびと」 太宰治 ……………118
- 19 「熊出沒注意」・「作品の履歴書としてのあとがき」 南木佳士 ……………126
- 20 「涙が涸れる」・「詩とはなにか」 吉本隆明 ……………131

実用的文章

21	「日本の林業」	140
22	「外来生物」	144

6 評論(思想) 『末賀乃比礼』 『くず花』

設問	問1		問2	問3	問4		
	(イ)	(ア)			(iii)	(ii)	(i)
正解	③	⑤	④	④	①	②	④
配点	5	5	7	7	7	7	7
自己採点							
自己採点合計							

【出典】

【文章Ⅰ】▼『末賀乃比礼』

成立……江戸時代(一七八〇年)

ジャンル……評論(思想)

作者……市川匡麻呂

内容・特徴……国学者の本居宣長が唱えた古道論『直毘靈』(後に『古事記伝』の総論の一部としてまとめられる)を儒学の立場から批判したものの。

宣長は、古道論で『古事記』や『日本書紀』にある上代の伝承を神の道とほめたたえて皇統の尊さを述べ、さらに、儒教の聖人およびその思想を攻撃した。それに対して匡麻呂は、宣長の思想は日本古来の考え方に基づくものではなく、老荘思想の自然説によつたものだとして批判し、また、『古事記』『日本書紀』の伝える事柄は、文字伝来の後に天皇が政治的意図の下に作爲したものだと論

じて宣長説の根拠に疑義を呈した。また聖人批判に対しては、儒教で聖人とされている人物が、国家を建設し、治世・人倫の道を教えた功績を述べ、これを批判することは、徳川の世を批判することにもつながるとして反駁した。

書名は、儒教を批判する禍心まがこころを聖人の道という領布ひれで祓はらい清めるという意味である。

なお、本文は、『本居宣長全集』(大野晋・大久保正校訂・編 筑摩書房刊)によつたが、問題文としての体裁を整えるために、一部表記を改めている。

【文章Ⅱ】▼『くず花』

成立……江戸時代(一七八〇年)

ジャンル……評論(思想)

作者……本居宣長

内容・特徴……市川匡麻呂が『末賀乃比礼』で宣長の思想を批判したのを受けて、宣長が逐一これに反論を加えた論争書。宣長は本書で再度、皇統の尊さを説き、『古事記』や『日本書紀』の伝えることを信じるべきであるということや儒教批判を展開した。また、儒教に対抗しての老荘思想の自然説と、儒教渡来以前に生まれた神の道の自然とは異なるものだという反論も行つた。

書名は薬草の名(葛の花)に由来し、儒学という毒酒に酔いしれた学者を覚醒させるという意味で名付けられた。

なお、本文は、『本居宣長全集』(大野晋・大久保正校訂・編 筑摩書房刊)によつたが、問題文としての体裁を整えるために、一部表記を改めている。

【全文解釈】

【文章Ⅰ】

大昔の古い出来事を知ることができる御史書は、『古事記』や『日本書紀』である。天武天皇の御治世に、稗田阿礼が、天皇の御命令をお受けして御記録などを読み習い覚えた事柄などを、元明天皇の御治世に、太朝臣安麻呂が書き取つて『古事記』を作り、さらに八年を経て、舍人親王が、『日本書紀』を作

りなさると(聞いている)。おしなべて口承というものは、人に寿命の限りがあり、(さらに)出来事の伝承(の際)の誤りがあり、(真実の)多くは消えてしまいがちで、真実でないことばかりが残っているのが通例である。文字のある国は、文字で出来事を記したので、大昔(の古い出来事)をも現代(の出来事)のように伝えることは明白で、これを文字の利点と言うようだ。御国(日本)は、応神天皇の御治世に、外国から伝来して初めて文字を使い慣れるようになった。応神から天武まで三百年ほど、あの阿礼が読み覚えた御記録は、この三百年の間に作ったものであろう。応神より前の神武天皇(の時代)までが千年ほど、神武より(さらに)前の時代は、さらにどれほどの年数が経っていたのだろうか。おしなべて文字のない間は、その(間の出来)事はやはり口承のみであって、(真実が)消えてしまった例の一つであるので、大昔の古い出来事は、後の天皇のご思慮で作りなされた世を治めるための方法の一つであった。御国の歴史書を読むような人は、よくこの事情を理解しておけ。

【文章Ⅱ】

言葉を用いて言い伝えることと、文字を用いて書き伝えることを比べて言うとしたらその際には、どちらも長所や短所があつてどちらを優れているとも決めがたい中で、昔から文字を使い慣れた現代の心で考えるときは、口承だけであつたらそれは、万事不安であるにちがいないので、文字の方がはるかに優れているはずだと誰もが思うだろうが、大昔、口承だけであつた時代の心に立ち戻ってみると、その時代には文字がないからといって不自由なことはない。これは文字だけでなくあらゆる道具も何もかも昔にはなかつた物が、時代を経るにつれて新しく出現して、しだいにものごとが便利になっていくようだ。その新しく出現しはじめた物も、年数を経て使い慣れた心からすると、この物がなかつたような昔はさぞかし不便だつただろうと思うけれども、なかつた昔もけつして物事は不自由しなかつたのである。

文字についても皇国(日本)には漢字があり、片仮名があり、平仮名があつて、この三つのうちの一つでも欠けては何かにつけて具合が悪いが、中国には、片仮名も平仮名もないけれども、まったくこれらがなくても具合が悪いとは思わない。また遠いところへ大切な用事を言い送るのに、口頭では誤り

があるので、文書で書き送る、これは文字の利点である。しかしながらまた、文書ではわかりにくいこともあつて、場合によっては使いを遣つて詳しいことは口頭によって言い送つてよくわかることもある。これはまた口承の利点ではないか。だから「文字で書き表したものは言葉をすべて述べ尽くしたのではない」と中国の人(孔子)も言っているのであつた。

これによつて考えてみると、大昔の出来事も、後世まで口承のままであるならば、かえつて詳しい意味も伝わるはずなのに、むしろ文字での伝承になつて失つてしまったこともないはずがない。やはりこの長所や短所を言うならば、(口承と文字による伝承には)互いにいろいろあるにちがいないのに、今、(私、宣長を)非難する者(市川匡麻呂)が、口承の方には短所ばかりを挙げて長所を言わず、文字による伝承の方には長所ばかりを挙げて短所を言わないのは、偏つていないだろうか、いや、偏つている。口承は真実でないことばかりが残ると言っているけれども、この短所は文字による伝承でも同じことである。文字でも嘘を書き伝えると、真実は残らず、言葉でも真実を言い伝えると、どうして真実が残らないことがあるのか、いや、残るはずだ。

また、口承には誤りがあると言っているのは、たしかにその通りであつて、文字は不朽のものであるので、一度書き残した出来事は、何千年を経過してもそのまま残るのは文字の利点である。しかしながら文字のない時代は、文字のない時代の心であるために、口承とは言つても文字のある時代の口承とは大きく違つていて、でたらめなことはまったくない。現代においても、文字を知っている人は、万事を文字に託すために、暗記しては覚えておくことができないことも、文字を知らない人は、かえつてよく覚えておくことからも納得できるはずだ。

【設問解説】

問1 短語句の解釈問題

(ア)

「すべて」(副詞)

1 みんな。ことごとく。

2 おしなべて。一般的に。総じて。

3 まったく。決して。
* 3は、下に打消表現を伴う。

選択肢のうち、「すべて」の意味に該当するのは、①「まったく」、③「おしなべて」である。傍線部は、下に打消表現がないので、④が正解である。文脈を確認すると、傍線部に続けて、「言伝と言ふものは」とあって、これ以降、口承について、伝える人の寿命の問題、内容の誤り、消失しがちな点、真実ではないといった問題点を述べているところである。それら口承のあり方の傾向について「おしなべて」と解釈するのは、文脈的に問題はない。

- (イ)
- 「なかなか(に)」〔副詞〕
- 1 中途半端に。なまじつか。
 - 2 かえって。むしろ。

選択肢のうち、「なかなかに」の意味に該当するのは、⑤「むしろ」だけなので、正解は⑤である。

文脈を確認すると、【文章Ⅱ】では、文字による伝承の方が口承よりもはるかに優れていると一般に思われることを前提にしながら、②段落の後半で、詳しいことを伝えるのに文字による伝承よりも口承の方がよい場合があることを述べて口承の長所を確認している。それを踏まえて、③段落の冒頭で、「上古の事」についても「言伝へ(＝口承)」のままならば、かえって詳細な内容まで伝わったはずだと述べ、再度、「文字伝へ(＝文字による伝承)」になったことで「なかなか(＝むしろ)」失った事柄もあると同じことを繰り返しているのである。よって、⑤は文脈にも合う。

問2 語句と表現に関する説明問題

① 波線部 a

名詞	格助詞	動詞	接続助詞
		ラ行四段活用 「承る」	
詔	を	承り	て
天皇の御命令	を	お受けし	て

〔詔〕

- 1 天皇のお言葉。仰せごと。
- 2 天皇の命令を直接に下す文書。詔勅。

〔承る〕

- 1 「受く」の謙讓語。お受けする。お引き受けする。
- 2 「聞く」の謙讓語。お聞きする。拝聴する。

「承り」を「謙讓語」としている点は正しい。しかし、「稗田阿礼」への敬意を込めた表現」としている点が間違っている。謙讓語は動作の客体(受け手)に対する敬意を表す。ここでは、「承る」という動作の主体は、天皇の命令を受けた稗田阿礼で、命令した天皇が動作の客体(受け手)になり、天武天皇への敬意を込めた表現である。よって、①は不適当。

② 波線部 b

動詞	動詞	格助詞	係助詞
ラ行四段活用 「作る」	ハ行四段活用 「給ふ」		
作り	給ふ	と	なむ
連用形	終止形	と(聞いている)	
作り	なざる		

⑤ 波線部 e

副詞	名詞	係助詞	動詞	助動詞	助動詞
			カ行下二段活用 「欠く」 未然形 「欠け」 不自由し	打消 「ず」 連用形 「ざり」 連体形 「たり」	過去 「き」 終止形 「なり」 断定
さらに けつして	物事	は	欠け 不自由し	ざり なかつ	た のである

「なり」の識別

- 終止形（ラ変型活用語には連体形）＋なり
 ↓伝聞推定の助動詞「なり」（～そうだ・～という・～ようだ）
 ＊ラ変型活用語の連体形に接続した場合には、撥音便形や、撥音便の無表記形に注意する。
 【例】あるなり↓あんなり↓あなり
- 連体形・非活用語＋なり
 ↓断定・存在の助動詞「なり」（～だ・～である・～にいる）
 ＊存在の用法の場合は「体言（場所）＋なる＋体言」の形をとることが多い。
- 「なり」の一語で物事の状態や性質を示す
 ↓ナリ活用形容動詞の活用語尾「なり」
 ＊「いげ・らか・やか・がち・がほ」＋「なり」の形のものが多い。
- 連用形・副詞・助詞「に・と」＋なり↓ラ行四段活用動詞「なる」
 ＊「～に・と・く・ず」＋「なり」の形のものが多い。

「なり」を「伝聞の助動詞」としている点が間違いである。「なり」は過去の助動詞「き」の連体形「し」に接続しているので、前記2の断定の助動詞である。したがって、それを前提とした「言い伝えられてきた」という部分も間違いである。ここは、何か新しい物ができた場合、その新しい物を使い慣れた人たちからすれば、それがなかった昔は不便だっただろうと思うが、昔はないなら不自由することはなかったと断定しているのである。よ

って、「昔は事足りていたという事実」とするのは適当であるが、それを「言い伝えられてきた」とするのが間違っている。よって、⑤は不適当である。

問3 【文章Ⅱ】の①・②段落の内容説明問題

選択肢の内容に対応する本文の箇所を探して、選択肢と照らし合わせるこ

とが大切である。
 ①は、言葉と文字の得失に関する内容で、①段落の1・2行目の内容に該当する。

言を以て言ひ伝ふると、文字をもて書き伝ふるとを比べ言はむには、互ひに得失ありていづれを勝れりとも定めがたき中に、

ここでは、言葉で伝えることと、文字で書き伝えることには、お互いに長所と短所があり、どちらが勝っているとは決められないと述べている。よって、「得失を公平に比べることは、文字を使い慣れた現在では不可能なことだ」と、比較することが不可能だと述べているのではないので、①は不適当である。

②は、新しい物ができて使い慣れたところから、その物がなかった昔を思った内容で、①段落の4～6行目の内容に該当する。

これは文字のみならず、万の器も何もいにしへにはなかりし物の、世々を経るままに新たに出で来つつ、次第に事の便よきやうになりゆくめる。その新しく出で来始めたる物も、年を経て用ゐなれての心には、この物なかりけむ昔はさこそ不便なりつらめと思へども、

ここでは、文字に限らず、さまざまな道具も何も、新しくできた物に使い慣れると、なかった昔は、さぞかし不便だっただろうと思うものだと言っている。よって、「文字のなかった昔に戻ることはできないことだ」と、過去には戻れないということ述べているわけではない。

③は、日本の文字と中国の文字について述べた内容で、②段落の1・2行目の内容に該当する。

皇国には漢字あり、片仮名あり、平仮名ありて、この三つの内一つも欠けては事によりて不便なるを、漢国には、片仮名も平仮名もなければ、さらにこれなくて不便なりとは思はず。

日本には漢字、片仮名、平仮名の三種類があり、一つでも欠ければ不便なこともあるのに対して、中国にはそもそも片仮名、平仮名はないので、これらがなくて困ることはないという対比を述べているだけで、「漢字しかない中国よりも複雑な事象を理解することができる」ということは述べていない。

④が正解である。文字の利点を生かした具体例を挙げて述べた内容で、②段落の2・3行目に該当する。

遠き所へ大切な用事を言ひやるに、口状にては違ひあるが故に、書状にて言ひやる、これは文字の徳なり。

遠方に人を遣わして用事を伝える場合に、口頭では間違いがあるので、書状で伝えることは、文字の優れた点であると述べている。したがって、選択肢の「遠方へ大事な連絡をする際には、文字で記した方が間違いがないという文字の長所を生かして書面を利用することがあり得る」という内容は合っている。

⑤は、言葉による伝達について述べた内容で、②段落の3～5行目に該当する。

しかれどもまた、書状にては分かりがたき事もありて、品によりては使をさして詳しき事は口状にて言ひやりてよく分かる事もあり。これはまた言伝への徳ならずや。されば「書は言を尽くさず」と漢人もいへりき。

宣長は書状で伝える利点を述べる一方で、書状ではわかりにくいことがあるときは、内容によつては使者を遣つて詳しいことは口頭で伝えるとよくわかることがあると、口頭での伝達の利点を述べている。その後に「書は言を尽くさず」という『易経』の孔子の言葉の一節を引用している。これは、文字では言いたいことを余すことなく伝えることはできないということであつて、「言葉で伝えることは、情報の量という点において文字で伝えることには及ばないということ」ではない。

問4 【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】のありようについての問題

【文章Ⅰ】および【文章Ⅱ】の内容に沿って生徒と教師との会話を理解し、

空欄に合う選択肢を選ぶ。

(i) 生徒Aが【文章Ⅰ】について述べたことに対して、生徒Bは同意し、それに続けて「【文章Ⅰ】では」と発言しているから、空欄Xには【文章Ⅰ】に関する内容が入る。そこで、【文章Ⅰ】の内容を検討してみる。

A 上つ代の古事を知るべき御文は、古事記・日本書紀なり。天武天皇の御代に、稗田阿礼、詔を承りて御文どもを読み習ひ覚えたることを、元明天皇の御代に、太朝臣安麻呂書き取りて古事記を作り、また八年を経て、舍人親王、書紀を作り給ふとなむ。(【文章Ⅰ】1～3行目)

B すべて言伝と言ふものは、人に命の極みあり、事に伝への謬あり、多くは消ぬるがちに於て、実ならぬ事のみ残れるぞ常の例なる。(【文章Ⅰ】3・4行目)

口承は、伝えていく人にも寿命があり、間違つた内容が伝わり、多くは消滅したり、真実が残らないと述べている。

C 文字ある国は、文字にて事を記しつれば、上つ代をも今の如く知らずる事いちしろく、これを文字の徳と言ふめり。御国は、応神天皇の御代に、異国より渡り来て始めて文字を用る習へり。(【文章Ⅰ】4・5行目)

文字による伝承はかつての出来事を今あつたことのように伝えることができる。文字の優れた点を挙げ、その文字は、日本には、応神天皇のときに伝来したと述べている。

D 応神より天武まで三百年ばかり、かの阿礼が読み習ひたる御文どもは、この三百年のほどに作りたるものなるべし。応神より上つ方神武天皇まで千年ばかり、神武より上つ方は、また幾年や経たりけむ。(【文章Ⅰ】5～7行目)

稗田阿礼が読み習った、『古事記』の元になるさまざまな記録は、応神天皇から天武天皇までの三百年ほどの期間に作られたものであることを指摘している。そのうえで、応神天皇から初代の神武天皇の即位までは文字伝来以前の千年間のこと、さらに、神武天皇以前の神話の時代ともなると、どれほど前になるのかわからないほどだと、『古事記』のもとになった記録には文

字のなかった長い期間のことも含んでいると指摘している。

E すべて文字なき間は、その事はた言伝のみにして、消ぬる例の中なれば、上つ代の古事は、後の天皇の御慮にならせつる秘事なりけり。(文章Ⅰ) 7・8行目)

文字のない間の出来事は、口承しか方法はなく、史実が消えてしまった例もあるので、大昔の古い出来事は、後の天皇の作為であると述べている。

以上を踏まえて、選択肢を検討していく。

①が正解である。「言い伝えられた内容に誤りがあったり、後世に創作されていたり」が前記B・Eに対応する。また、それを「信憑性に欠ける」とだと結論づけるのも前記Eから言えることである。

②は、「人の記憶はいいかげんなもので」が前記Bから読み取れる内容だが、「言葉だけで伝えられた歴史を裏付ける証拠を探さなければならぬ」については、本文に根拠を持たないので、不適當である。

③は、「言葉によって語られた歴史も、文字の発明によってすべて記録されるようになり」は本文に根拠がなく、「信頼のおけるものとなった」も前記Eに矛盾する。

④は、「文字がなくても、古代の歴史は正確に言い伝えられてきた」が、前記B・Dに合致しない。なお、「後世の権力者によって内容は書き換えられた」は前記Eの後半に対応しており、間違いとは言えない。

(ii) 空欄Yは、「文章Ⅰ」に対する本居宣長の反論の内容が入る。反論の中心は③段落に記されている。

A 上古の事も、後まで言伝のままならば、かへりて詳しくき意味も伝はるべきが、なかなか文字伝へになりて失ひぬることもあるまじきにあらず。(③段落1・2行目)

文字ではなく口承のまま伝えられたならば、かえって詳しい内容まで伝わらだるうが、文字で伝えたために内容が失われたこともあると述べている。

この点については、④段落で、文字がない時代は文字がない故に詳しいことまで記憶して口承していたが、文字で記録する時代になると文字に頼るために、細かいところを記憶しておくことができなると述べていることから理解できる。

B なほこの得失を言はば、互ひに種々あるべきを、今、難者、言伝への方には失をのみ挙げて得を言はず、文字伝への方には得をのみ挙げて失を言はぬは、偏ならずや。(③段落2・3行目)

口承と文字による伝承のどちらにも長所・短所があるにもかかわらず、市川匡麻呂は、口承には短所のみを挙げ、文字による伝承には長所だけを挙げているので、偏った議論だと述べている。

C 言伝へは実ならぬ事のみのことと言へれども、この失は文字伝へにも同じ事なり。文字にても虚を書き伝ふれば、実はのこらず、言にても実を言ひ伝へば、などか実のこらざらむ。(③段落3～5行目)

市川匡麻呂は、口承は嘘ばかりが残ると主張するが、それは文字による伝承でも同じで、文字でも嘘を書けば、嘘が残るし、逆に、真実を口承すれば、真実が残るはずだと述べている。

以上を踏まえて、選択肢を検討していく。

①は、「言葉は真実を語るものであるが、文字は虚実に関係がない」が、前記Cに合わない。

②が正解である。「文字があつても嘘を記せば歴史の真実は伝わらないのだから、文字で書かれた歴史がすべて正しいとは言えない」が前記Cに対応している。

③は、「後世まで言い伝えられたものなら、文字で書かれた歴史書よりも信用できるはずだ」が不適當である。確かに前記Aで、文字で伝えたためにかえって詳しい内容が失われてしまう場合もあると述べているが、前記Cにおいては、口承でも文字による伝承でも嘘の内容が伝わるのはどちらも同じだと述べている。

④は、選択肢全体が不適當である。「書かれた歴史はそれ自体が消滅する恐れがある」も、「言葉による伝承は人が生存する限りこの世から消滅はしない」も、いずれも本文に書かれていない内容である。

(iii) 空欄Zは、教師の「宣長は言葉による伝承と文字による伝承について、それぞれの弊害についても意見を述べています」という発言を受けて、生徒Aが宣長の考えを指摘しているという箇所である。宣長がそれぞれの伝承の弊害について述べている内容は、「文章Ⅱ」の④段落に記されてい

る。

A また、言に伝への誤りありと言へるは、まことにさるることにて、文字は不朽の物なれば、一たび記し置きつる事は、いく千年を経てそのままでのこるは文字の徳なり。(4段落1・2行目)

口承に誤りがあることについては、「まことにさるることにて」と、宣長も同意している。そのうえで、文字は一度書かれれば、そのままずっと残ることとは文字の長所であると述べている。

B しかれども文字なき世は、文字なき世の心なる故に、言伝へとても文字ある世の言伝へとは大いに異にして、うきたることさらになし。

(4段落2・3行目)

文字がない時代は、それが当たり前であるから、口承といっても文字がある時代の口承とはまったく性質が異なり、でたらめなところはまったくないと述べている。

C 今の世とても、文字知れる人は、万の事を文字に預くる故に、空にはえおぼえをらぬ事をも、文字しらぬ人は、かへりてよくおぼえをるにてさとのべし。(4段落3・4行目)

文字を知っていると、万事を文字に依存してしまつたために、記憶できないことも、文字を知らない人はかえつてよく記憶していると述べている。

以上を踏まえて、選択肢を検討していく。

①は、「文字の発明後も言葉に頼るのは、文明に逆行することになる」が、本文に書かれていない内容なので、不適当である。

②は、「言葉が巧みな人には……簡単にできてしまう」は、本文に書かれていない内容なので、不適当である。

③は、「文字による伝承は、一度記しておけばいつまでも残るものだ」は、前記Aに対応するが、それを「逆に書き改めることはできなくなってしまう」という弊害については、本文に書かれていない内容なので、不適当である。

④が正解である。「文字を知っている人は、文字に頼り過ぎるあまりに、文字がなかった時代の人よりも物事を記憶する能力が劣る」が、前記B・Cに対応する。



9784777227648

ISBN978-4-7772-2764-8
C7381



1927381000001

SERIES

国語

現代文

解答・解説編



KAWAI PUBLISHING

学
年

組

番
号

名
前